

2024 年濱口梧陵国際作文コンテスト 結果概要

Summary of the Result Hamaguchi Essay Contest 2024

[募集概要] [Contest Guidelines]

応募資格 ; 高校生

Qualification; High School Student

テ ー マ ; 濱口梧陵のエピソードを読んで、「考えたこと」「感じたこと」「体験したこと」等を自分の言葉で綴ること。

Theme; Sharing what you felt, thought, or experienced in your own words, when reading HAMAGUCHI Goryo's anecdote.

(詳細については、14 ページ参照)

(See the page 15 for details)

[募集結果] [Result]

6 カ国から 50 作品の応募

(インド、日本、マレーシア、メキシコ、スリランカ、米国)

50 essays sent from 6 countries.

(India, Japan, Malaysia, Mexico, Sri Lanka, USA)

[受賞作品] [Awardees]

優秀賞 : 1 作品 1 Excellent Award essay

Punyakeerthy Ram Mohan, SDVEMHSS, Alappuzha, Kerala, India
Title: Beacon of Sacrifice

入 選 : 3 作品 3 Award essays

湯浅 侑那 浜松日体高等学校 日本
YUASA Yuna, Hamamatsu Nippon Sport Science University High School, Japan
題名 : 稲むらの火の知恵
Title: The Wisdom - the Fire of Rice Sheaves - ※

黒川 海空 長崎県立長崎西高等学校 日本
KUROKAWA Misora Nagasaki Nishi High School, Japan
題名 : 梧陵の精神を受け継いで
Title: Inheriting Goryo's spirit ※

SAJAL JAIN, AGRA PUBLIC SCHOOL, India
Title: WHY GORYO MATTERS
THE MAN WHO REDEFINED DISASTER MANAGEMENT

優秀賞：1 作品

1 Excellent Award essay

Punyakeerthy Ram Mohan,

SDVEMHSS, Alappuzha, Kerala, India

Title: Beacon of Sacrifice

Beacon of Sacrifice

"Inamura no Hi" (The Burning of the Rice Sheaves) is a Japanese event commemorating an act of heroism that took place in 1854. This powerful Japanese tale, rooted in historical events, holds significant cultural, educational and moral value. A village leader and farmer, Hamaguchi Goryo, set fire to his rice sheaves to warn villagers of an approaching tsunami, saving many lives. This story serves as a reminder of the importance of disaster preparedness and community responsibility.

The farmer's decision to burn his rice stacks, his primary source of income, exemplifies selflessness. His actions underscore the importance of prioritizing the well-being of the community over individual gains. This act of selflessness is a powerful reminder of the moral imperative to put others' needs before our own in times of crisis. It challenges readers to reflect on their own capacity for altruism and the ways in which they might act for the greater good, even at great personal cost.

It emphasizes that in times of disaster, the strength and resilience of a community can make the difference between life and death. The notion, "Inamura no Hi" advocates for a cohesive social fabric where individuals look out for one another, reinforcing the idea that unity and cooperation are vital in overcoming challenges. The villagers' rush to help the farmer shows the strong sense of community and cooperation. The farmer's wisdom and keen observation of nature's signs demonstrate the importance of being vigilant, aware and prepared in the face of natural disasters. The story subtly reminds readers of the power of nature and the need for humility and respect towards it.

As both a historical narrative and a moral fable, "Inamura no Hi" remains a vital part of cultural heritage and a guiding light for future generations in the ongoing quest for resilience and community solidarity in the face of adversity.

In modern disaster management practices, the principles illustrated in "Inamura no Hi" are echoed in policies that emphasize community-based disaster risk reduction, early warning systems, and the importance of local knowledge and leadership. The story serves as an inspirational model for how communities can effectively respond to and recover from disasters through collective action and mutual support.

Just like Japan, India is prone to natural disasters such as earthquakes, tsunamis, and floods. In India, community leaders and local administrations play crucial roles in disaster response and relief efforts. Also, the importance of community awareness and preparedness in disaster management is a significant focus in India. The concept of self-sacrifice for the greater good is a common theme in many Indian stories and traditions. The theme of "Inamura no Hi" aligns with the values upheld in Indian culture, where communal harmony and helping others in times of need are deeply rooted principles.

In India, there is an emphasis on educating the public, especially children, about natural disasters and safety measures through various programs and initiatives such as early warning systems, community drills, and awareness campaigns. To quote an example, during the 2018 floods, which happened in an Indian state Kerala, local leaders and volunteers were instrumental in rescue operations and relief distribution. Similarly, the stories of resilience and heroism during past disasters are used to inspire and educate the public. For example, the stories of bravery and resilience during the 2004 Indian Ocean Tsunami are still shared through various media to promote the importance of preparedness and community support. India's response to Cyclone Phailin in 2013 demonstrated significant improvements in disaster management. Early warning systems, efficient evacuations, and community awareness programs helped minimize casualties. This approach aligns with the principles exemplified by Goryo Hamaguchi's actions. In many Indian coastal and rural communities, traditional knowledge and practices play a crucial role in disaster preparedness. For example, certain fishing communities have historically used natural signs to predict weather changes and potential disasters.

While the original story doesn't involve technology, modern interpretations can integrate technological advancements in disaster preparedness. Technologies such as Geographic Information Systems, remote sensing and mobile applications can enhance disaster management efforts. Emphasizing proactive measures, community leadership, education, technological integration and cultural storytelling can help build resilient communities capable of effectively responding to natural disasters.

題名：犠牲の灯（仮訳）

「稲むらの火」は、1854年に日本で起こった英雄的な行為を記念するものである。歴史的出来事に根ざしたこの力強い日本の物語は、意義深い文化的、教育的、道徳的な価値がある。一人の農民として村のリーダーであった濱口梧陵は、津波の接近を村人に警告するために稲むらに火を放ち、多くの命を救った。この物語は、災害への備えと地域社会の責任の重要性を再認識させてくれる。

農民が根本的な収入源である稲の山を燃やすという決断は、無私無欲の典型である。彼の行動は、個人の利益よりもコミュニティの幸福を優先することの重要性を強調している。この無私の行為は、危機の際には自分自身よりも他人の難局を優先するという道徳的義務を強く思い出させてくれる。そして読者に、自分自身の利他主義の能力と、たとえ大きな個人的な犠牲を払っても、大義のために行動する方法について考えるよう促している。

この物語は、災害時にはコミュニティの強さと回復力が生死を分ける可能性があることを強調している。「稲むらの火」という概念は、個人が互いに気配りをし、単一性と協調が課題を克服するため極めて重要であるという考えを強固にするような団結した社会構造を推奨している。村人たちが農民を助けるために急いで駆けつける様子は、強い共同体意識と協力意識を示している。農民の知恵と自然の兆候に対する鋭い観察力は、自然災害に対して警戒し、気付き、備えることの重要性を示している。この物語は読者に、自然の力と、それに対する謙虚さと敬意の必要性をさりげなく認識させる。

歴史物語であると同時に道徳的な寓話でもある「稲むらの火」は、文化遺産の重要な一部であり、逆境に直面する中、回復力とコミュニティの結束を継続的に追求する将来の世代にとっての道標となっている。

現代の災害管理の実践において、「稲むらの火」で示された原則は、コミュニティベースの災害リスク軽減、早期警報システム、そして地元の知識とリーダーシップの重要性に重点をおいた政策に反映されている。この物語は、コミュニティが災害に対して、集団的な行動と相互支援を通じて、効果的に対応し、復旧しうる方法を鼓舞するモデルとして機能している。

日本と同様に、インドも地震、津波、洪水などの自然災害が発生しやすい国である。インドでは、コミュニティのリーダーや地方政府が、災害対応と救援活動において重要な役割を担っている。また、災害管理におけるコミュニティの自覚と準備の重要性は、インドでも大きな焦点となっている。大義のために自己を犠牲にするという考えは、多くのインドの物語や言い伝えに共通するテーマである。「稲むらの火」のテーマは、地域社会の調和と、困ったときに他者を助けるという理念が深く根付いたインド文化の価値観と一致している。

インドでは、早期警報システムや、地域の防災訓練、啓発キャンペーンなど、さまざまなプログラムや取り組みを通じて、一般の人々、特に子供たちに、自然災害や防災対策について教育することを重視している。一例を挙げると、2018年にインドのケララ州で発生した洪水の際、地元の指導者達やボランティアが救助活動や救援物資の配布に尽力しました。同様に、過去の災害時における回復力と英雄的行為に関する物語は、一般の人々を鼓舞し、教育するために使われます。たとえば、2004年のインド洋津波の際の勇気と回復力に関する物語は、備えとコミュニティの支援の重要性を広めるため、今でもさまざまなメディアを通じて共有されている。2013年のサイクロン“ファイリン”に対するインドの対応は、災害管理の大幅な改善を示した。早期警報システム、効率的な避難、地域社会の啓発プログラムにより、死傷者を最小限に抑えることができた。このアプローチは、濱口梧陵氏の行動に示された原則と一致していた。インドの沿岸部や地方の多くのコミュニティでは、伝統的な知識と慣習が、災害への備えにおいて重要な役割を果たしている。たとえば、ある漁業コミュニティでは、歴史的に、自然の兆候を利用して天候の変化や災害の可能性を予測してきた。

元々の物語はテクノロジーを含んでいないが、現代社会では、テクノロジーの進歩を取り入れた防災対策を実施することができる。地理情報システム、リモートセンシング、モバイルアプリケーションなどのテクノロジーは、災害管理の取り組みを強化することができる。積極的な対策、コミュニティのリーダーシップ、教育、テクノロジーの統合、教養的な言い伝えを重視することで、自然災害に効果的に対応できる強靱なコミュニティを築くことができる。

（本仮訳は、読者の理解に資するため、事務局が作成したものです。細かなニュアンスなどは原文をご確認ください。）

入選：3作品

3 Award essays

湯浅 侑那 YUASA Yuna

浜松日体高等学校

Hamamatsu Nippon Sport Science University High School,
Japan

題名：稲むらの火の知恵

Title: The Wisdom - the Fire of Rice Sheaves -

黒川 海空 KUROKAWA Misora

長崎県立長崎西高等学校

Nagasaki Nishi High School, Japan

題名：梧陵の精神を受け継いで

Title: Inheriting the Goryo's spirit

SAJAL JAIN,

AGRA PUBLIC SCHOOL, India

Title: WHY GORYO MATTERS THE MAN WHO REDEFINED
DISASTER MANAGEMENT

題名：稲むらの火の知恵

私は現在浜松市に住んでいるが、小学校までを和歌山県で過ごした。私が濱口梧陵について知ったのは、小学校5年生の時に稲むらの火の館を訪れたことがきっかけだ。大地震の後にくる津波から村の人々の命を守るために、保管していた貴重な稲むらに火をつけたという話を聞き、当時の私はとても驚いた。自分の大事な物を犠牲にしてでも人々の命を救おうとする姿に凄いと思ったからだ。また津波の映像を体験することができ、それを体感した私はあまりの恐怖に声を上げた。今でも鮮明に覚えている。私がもし濱口梧陵の立場であったならば、このような恐ろしい状況下で、果たしてそのようなことを思いつくことができるだろうか、自分の大事な物に迷わず火をつけるという覚悟を決められるだろうか、今あらためて深く考えさせられる。先日、母と買い物に出かけた時、もし今地震が起き、津波が来たらどうするかという話題になった。私たちは屋上の駐車場にいたため、車のライトを照らし避難を誘導しようという案が浮かんだが、ふと考えさせられた。ライトを照らす行為は、私たちにとって何の痛手もない。この方法を思いつくことができるのは、稲むらの火の話を知っているからだと思った。稲むらの火の教訓は、私のなかに確実に根付いている。濱口梧陵は、全員の村人の命を救うことだけを第一に考えていた。自分だけが助かればいいのではなく、村人全員で助かるため、この方法を瞬時に思いつき行動に移した勇氣は、現代の私たちに欠けている最も見習うべき点であると思う。さらに、濱口梧陵は震災により甚大な被害を受けた村を建て直すため、自身の財産で村人たちを雇い堤防を築いている。「これで村が救えるのなら。」という強い思いで村の復興を支援した。私は濱口梧陵の「誰かのためになるのなら自分の財産を使ってでもそれは価値あることだ。」という考えに感銘を受けた。自身のことのみを最優先に考えるのではなく、他者を思いやり心と互いに助け合うという強固な信頼関係の構築の元に団結力が生まれ、困難な事も乗り越えられるのだと思った。

私の家族は母が医療系の仕事をしていたこともあり、防災意識がとても高い。災害時に備えて避難場所の確認、非常食や水の確保、救急用品の準備をしたり、防災イベントに参加したりしている。私は和歌山と浜松に住んだことで、防災意識は、地形や地域によって意識の高い分野が違うことに気が付いた。和歌山県は海に面し、台風がよく通る地域であり、防風や高潮に対する意識が高い。南海トラフ地震による津波をととても警戒している。一方で、浜松は川の氾濫や火事、防犯に対しての意識が高い。どちらにも津波避難タワーが設置されており、幼少期から防災教育や防災訓練が積極的に行われ、住民の防災・減災意識は高い。浜松では外国語での案内が様々な場面で日常的に行われている。双方の優れた点を伝えることで、さらに強い対策ができると思う。

昨年、母と横浜国立大学で開催された「ぼうさいこくたい」に参加し、様々な企業の防災・減災対策を知ることができた。クイズ形式で防災への対策を学べるブースでは、阪神・淡路大震災における高速道路の被害から、橋の支柱を太くし倒壊を防ぐという対策がなされていることを知った。日本国内に一台しか存在していないという眼科の車の初めて見た。車内には数多くの検査機器の設備が整っており、眼科病院の中にいるような感覚で非常に驚いた。海外に救援にも行ったと聞き、このような救護車を各地方で確保することができれば良いなと思った。普段見聞きすることのできない社会の取り組みについて知ることができ、非常に学びの多い一日であった。

現在、南海トラフ地震への警戒が強まっている。濱口梧陵の生き方から学んだ「他者を思いやり、互いに助け合う」「困難に屈することなく、果敢に挑戦する」精神を皆で再認識し、自然災害に向き合っていきたいと思う。

Title: The Wisdom - Fire of Rice Sheaves - (Provisional English Translation)

I currently live in Hamamatsu City, but I spent my time in Wakayama Prefecture until graduating elementary school. A chance to learn about Hamaguchi Goryo was the Inamura-no-Hi no Yakata I visited in the fifth grade. I was very surprised at the time by the story in which the rice sheaves stored preciously were set on fire to protect the lives from the tsunami that followed the big earthquake, because I was impressed by his willingness to sacrifice his own important things for saving people's lives. And tsunami images I was able to experience made me cry out in fear. I still remember it vividly. If I were in Hamaguchi Goryo's position, I would wonder whether I was able to come up with such an idea in such a terrifying situation, and whether I was able to make the decision to set fire to something important for me without hesitation. That makes me ponder deeply. The other day, when I went out shopping with my mother, we got onto a topic regarding what we would do if earthquake and tsunami occurred. We were in a rooftop parking lot at that time, so we thought about using the headlights to guide people safely, but we had a second thought right away. The act of shining a light doesn't hurt us at all. I thought the reason that I could conceive of this method was the fact that I already knew the story, the Fire of Rice Sheaves. The lesson based on the Fire of Rice Sheaves has firmly taken root in my mind. Hamaguchi Goryo's first and foremost concern had been to save all the lives living in the village. The courage he showed to instantly think of this method and put it into action to save not just himself, but the entire village is something we lack today and should really learn from. Furthermore, for the sake of reviving the village suffered from severe damages in the earthquake, Hamaguchi Goryo used his own property to hire villagers to build embankment. He supported the village's restoration with a strong feeling that "If it can save the village..." I was impressed by Hamaguchi Goryo's thought that "If it can help someone else, it is worth using your own wealth". I believe that caring for others and building solid/fiduciary relationship based on mutual support rather than just thinking about yourself first bear unity power, which allows us to overcome difficult situations.

My family has a strong consciousness of disaster prevention, as my mother worked in the medical field. In preparation for disasters, we check evacuation locations, secure emergency food and water, prepare first aid supplies, and participate in events relating to disaster prevention. Having lived in Wakayama and Hamamatsu, I realized that disaster prevention consciousness varies depending on the respective landforms/regions. Wakayama Prefecture faces sea and is a region where typhoons pass frequently, so there is a high consciousness to windbreaks and high tides. They are very wary of tsunami caused by the Nankai Trough Earthquake. On the other hand, Hamamatsu city has a high level of consciousness about river flooding, fire, and crime prevention. Both regions have tsunami evacuation towers, educate disaster prevention, and carry out drills actively from an early age, which lead to getting a high consciousness to disaster prevention and mitigation among their residents. In Hamamatsu city, guidance in foreign languages is commonly provided in a variety of places. I believe we could implement even stronger countermeasures by conveying both good points.

Last year, I attended the Disaster Prevention and Mitigation Club held at Yokohama National University with my mother, where I was able to learn about disaster prevention and mitigation measures being taken by various companies. At a booth where students could learn about disaster prevention measures in the form of a quiz, I learned that the countermeasure to make bridge pillars thicker has been taken to prevent them from recurrence of expressway's damages occurring in the Great Hanshin-Awaji Earthquake. I saw an eye clinic vehicle first time, which was only one in Japan. The car was equipped with a wide range of testing equipment, and I was very surprised as it felt like I was in an ophthalmic hospital. After I heard that the car had also went overseas to relieve people, I thought it would be great if we could secure such vehicles in each region. It was a very educational day, as I was able to learn about social initiatives that I would not normally see or hear about.

Now wariness against the Nankai Trough Earthquake has been on the rise. I hope that we could tackle natural disasters together, while re-acknowledging the spirit learned from the way of the Hamaguchi Goryo's life: "Be considerate of others and help each other" and "Take on bold challenges without giving in to difficulties."

題名： 梧陵の精神を受け継いで

「この人は何をしているのでしょうか。」

確かこんな問いかけから始まった授業だった。銅像の顔の表情から怒っているような、戦っているような気がした。火をもって人々を先導する姿の銅像は濱口梧陵であることを知った。1854年の安政南海地震のとき紀州有田郡広村での事実をもとに作られた「稲むらの火」逸話を読んで、農民にとって貴重な稲むらに火をつけたという儀兵衛（梧陵）の勇気ととっさの判断的確さに、防災意識の高さが感じられた。そして、郷土を誰よりも愛し、故郷を大切に思うからこそその行動と、人の命の尊さが感じられる行動に感銘を受けた。

今年1月、新しい年を迎え誰もがそれぞれのお正月を過ごしていた時のことだ。

「今すぐ逃げてください。大きな津波がきます。東日本大震災の時の思い出してください。多くの方々の命が奪われました。」

急な速報に驚いた。ニュースに映し出される映像は荒れた海、木々や街並みを吹き飛ばす強風など自然の恐ろしい姿だった。私たちの日常は一気に崩れ去る。

そんなときに思い出したのは中学校の頃に学習した「稲むらの火」の余話だった。このエピソードから学べるところはまず、第一に災害が起きたときに周りにそれを広め注意喚起を行うことだ。たいまつに火をつけ必死に周りの村人に伝えようとする姿は現在のニュースキャスターがテレビでその危険な状況を伝える姿と重なった。そこにはまず命を守りたいという強い思いが見られる。

私たちは学ばなければならない。日本では大きな震災がこれまで幾度となくあった。関東大震災、阪神淡路大震災、東日本大震災など、そのときの被害の様子や災害の状況などから学び、知恵と工夫を生かし、備えを強化するべきだ。そこに有効なのは、メディアと教育だと考える。テレビやラジオ、新聞などは老若男女問わず幅広く様々な人々に情報を伝えることができる。防災の大切さや自分で自分の身を守るためにできることなどをまずは知ることが大切だ。現在ではSNSの普及により更に防災のネットワークを広げ活用することができる。携帯電話等への緊急地震速報の合図はすでに浸透しているし、人命救助なども、その場で教えてもらいながら対処できるような活用方も増えてきている。

教育現場では避難訓練があったり、私が習ったように震災で尽力した方々の話に学んだりして、自分の命を守るためにどうしたらいいか考える機会がある。ただ、その機会はそれほど多くはない。定期的に行うことで定着させることが大切だと思う。また、各地域でも学ぶ必要がある。その土地の地形により考えられる災害や被害の予測なども踏まえて考えなければならないからだ。大人も子どももみんなで防災意識を高めることが大切だ。

震災は人の力ではどうにもならない。しかし、震災が起こった場合どのように対処すべきか、事前に学び、備えておくことで命を守ることに繋がる。現在も南海トラフ巨大地震が予測されており、防災の意識を高める必要性を強く感じる。そして、そこで終わりではない。被災後の復興へ向けた活動の方策も考えておくべきだ。濱口梧陵は郷土の復興のため巨額の私財を投じ、震災に備え広村堤防の造築にも取り組んだ。彼の行動はリーダーシップ、危機管理、社会貢献の重要性を教えてくれる。「住民の幸せのために郷土を復興する」という信念を燃やし続けた梧陵の精神を私たちは受け継がなければならない。

人間は防犯意識自然の暴威に対し無力であるが、知性と助け合いの心をもって、また元のように自らの力で立ち上がることができる。そのために普段から命を守るための心構えを養い、地域社会と世界全体の安全を考えていきたい。

Title: Inheriting Goryo's spirit (Provisional English Translation)

"What is this man doing?"

I'm pretty sure the lesson started with a question like this. The expression on the statue's face made it look angry, like it was fighting. I learned that the bronze statue leading the people with fire was Hamaguchi Goryo. After reading the anecdote "The Fire of Rice Sheaves" based on the fact that took place in Hiromura village, Arida county, Kishu during the Ansei Nankai earthquake in 1854, I felt that the Gihei's (Goryo's) courage and his quick/precise judgment in setting fire to the rice sheaves which were precious to the farmers showed high level of his awareness regarding disaster prevention. And I was also impressed by the action, which came from his love for the hometown and cherishing it more than anyone else, and which made me feel the value of life.

It was just January this year when everyone was celebrating the New Year in their own way.

"Please evacuate immediately. A big tsunami is coming. Please remember the Great East Japan Earthquake. Many lives were lost."

I was surprised by the sudden news. The images broadcasted on the news showed terrifying scenes of nature, including rough seas and strong winds blowing away trees and cityscapes. Our daily lives suddenly fall apart.

At that moment, I remembered an anecdote about "The Fire of Rice Sheaves" that I learned in junior high school. The first thing we can learn from this episode is that we should firstly spread the fact that the disaster occurs to alert people. The sight of trying to inform the surrounding villagers desperately with torches lighting reminded me of the way present news anchors report on the dangerous situation on television. There is a strong desire we can see to protect life more than anything.

We have to learn. Japan has experienced major earthquakes repeatedly. We should learn from the damages and situations caused by disasters such as the Great Kanto Earthquake, the Great Hanshin-Awaji Earthquake, and the Great East Japan Earthquake, and use our wisdom and ingenuity to strengthen our preparations. I believe that media and education are effective in this regard. Television, radio, newspapers, etc. can convey information to a wide range of people, regardless of age or gender. It is important to know first the importance of disaster prevention and what you can do to protect yourself. Nowadays, we can expand and utilize disaster prevention networks due to the spread of social media. Emergency earthquake alert signals sent to devices like mobile phone have already been widespread, and the usage which allows us to deal with emergency such as rescue operation while we get on-the-spot instructions has increased, too.

In the field of education, you do evacuation drills and learn about the stories heard from people who worked hard during the earthquake as I did, and these experiences offer opportunities to think about what to do to protect your own life. However, there aren't many opportunities. I think it's important to do it regularly so that it becomes a habit. There is also necessity for learning in each region because you have to consider while taking into account possible disasters and damages depending on each landform. It is important for everyone, both adults and children, to raise their consciousness of disaster prevention.

Earthquake cannot be managed by human effort alone. However, learning in advance and preparing for what to do in the case of earthquake can help save lives. Now the Nankai Trough Earthquake is prospective to occur, and I feel a strong need to raise consciousness of disaster prevention. But it doesn't end there. We should also consider ways to carry out activities toward post-disaster recovery. Hamaguchi Goryo invested a huge amount of his personal wealth in restoring his hometown and worked on the construction of the Hiromura Embankment in preparation for future earthquakes, too. His actions teach us the importance of leadership, crisis management, and social contribution. We must inherit the Goryo's spirit that means keeping conviction to "restore his hometown for the happiness to its residents."

Humans are powerless against the violent forces of nature, but they can once again stand up for themselves with intelligence and a spirit of cooperation. Therefore, I want to foster my mental attitude to protect our lives and think about the safety regarding both our local communities and the entire world.

WHY GORYO MATTERS
THE MAN WHO REDEFINED DISASTER MANAGEMENT

Japan's disaster management is shining globally
Saving the world from injuring Totally
Hiro-mura is now centre for global vision
This is reflection of Goryo's mission

Our world is complexly integrated with nature in various perspectives. If we are deriving our needs from nature we should also be prepared for tsunamis and earthquakes. We can't terminate them but we can minimize the loss and threat to our life. but the question arises how we can minimize the disasters?

General people shape the basic structure of every nation. Educating general people about tsunamis and earthquakes will make our vision true . Every person in the world from child to adult uses the internet . spreading information related to disaster management through the internet is quite useful and beneficial. When I was child I read about Goryo in a Story book. Upon reading this story my mind got filled with the spirit to work selflessly in guiding innocent civilians about tsunamis and earthquakes. It inspired me a lot that I also prepared a chart on Disaster Management and submitted it to my class Teacher to Paste it in on the school's notice board to aware other students about Natural Calamities. Now I am in High school and the Member of School's Disaster Management Committee. I also coordinated with the students of different schools regarding Disaster Management .

Such stories should be part of nursery School's curriculum around the world as these children are tiny saplings and the future of this globe. A Large section of society is also a subscriber of social media . Through blogs , reels, post amd graphical representations we can also spread awareness among Peoples.

Disaster management is now world's need
goryo's vision shall make it succeed

Goryo Not only constructed an embankment but he laid the foundation of the disaster management system years ago in the era when there were no advanced technologies as well as resources were also Limited. His action also demonstrated that human lives are more important than any other thing. He didn't care about the rice sheaves while putting fire into it; he only thought about the lives of citizens of the village . Even if we are not having plenty of resources we might prevent the loss of lives with a strong will , durable plan , a clear vision and definite mission. Just like Goryo's mind is having a clear thought that the tsunami caused due to earthquake is not temporary this needs a permanent solution the embankments and also a place which is above the sea level for peoples to escape .He also teaches us one more thing that one should help others not only think about him/herself . If we save others we will save ourself too.

In my state(Uttar Pradesh) people gather at the sea shores and banks of different rivers in the month of August to celebrate Sawan Festival. Through this festival people get aware about the natural disasters which arise from the water bodies . citizens also volunteer the work of building embankments as well as big pits for the prevention of flood or tsunamis. My country is quite familiar with earthquakes and tsunamis . In 2004 India got hit by a huge Tsunami .

In the era of consumerism ,
Goryo showed humanity
Not only saved the lives

but has also given the message of Unity

Working together is also an important perspective that can be derived from this story . The peoples of Hiro-mura worked together to fight against the tsunami. We should also work Together . It is not one's own problem but a Global Issue .

Engagement and people's connection with each other is quite necessary for prevention. We should also remain attached with the tribal peoples who reside on sea shores as these peoples hold the vast knowledge about detection of natural Calamities.

Let's join hands to prevent disaster
in doing this Goryo is our master
Goryo's endeavour is on its way to shine
with our little efforts we can make it more fine

題名： 梧陵が重要な理由
災害管理を再定義した人物（仮訳）

日本の災害対策は世界的に輝いている
世界全体を傷つくことから救う
広村は今や世界的な未来像の中心地
これは梧陵の使命を反映するもの

私たちの世界は、さまざまな観点から自然と複雑に絡み合っている。私たちが自然から必要なものを得るなら、津波や地震にも備える必要がある。災害を皆無にすることはできなくても、私たちの生命に対する損失と脅威を最小限に抑えることはできる。しかし、問題はどうすれば災害を最小限に抑えることができるのかである。

一般の人々が国の基本構造を形作ります。人々に津波と地震について教育することで、私たちのビジョンが実現する。世界中の子供から大人まで誰もがインターネットを利用しているため、インターネットを通じて災害管理に関する情報を広めることは、非常に有用で有益である。子供の頃、私は物語の本で梧陵について読んだ。この話を読んで、私の心は津波や地震において、罪のない人々を導くという無私無欲で働く精神で満たされた。それは大きく私を鼓舞し、災害管理に関するチャートを作成し、クラスの先生に提出して学校の掲示板に貼り付けもらい、自然災害について他の生徒に注意喚起することにつながった。現在私は高校生で、学校の防災委員会の委員を務めている。災害管理に関して他校の生徒とも協働した。

小さな子どもたちは苗木のような存在であり地球の未来なので、このような物語は、世界中の保育の場の課程の一部となるべきである。社会の大部分の人々も SNS の利用者であり、ブログ、ショートムービー、投稿、図示などを通じて、人々に認識を広めることもできる。

災害管理は今や世界が必要とするもの
梧陵のビジョンがそれを導く

梧陵は、堤防を建設しただけでなく、先進技術がなく資源も限られていた時代に、災害管理の基礎を築いた。彼の行動はまた、人間の命が他の何よりも大切であることを証明した。彼は稲むらに火を付けているとき、稲むらのことなど気にしなかった。気にしていたのは、村人達の命だけであった。私たちは、たとえ十分な物資がなかったとしても、強い意志、恒久的な計画、明確なビジョン、そして明確な使命があれば、命が失われることを防げるかもしれない。地震によって発生する津波は一時的なものではないことから、恒久的な解決策として、堤防や海面より高い場所に人々が避難できる場所が必要であると、梧陵は明確に認識している。彼はまた、自分自身のことだけを考えるのではなく、他者を助けるべきだということを私たちに教える。他者を救えば、自分達も救われる。

私の州（ウッタル・プラデーシュ州）では、8月になると人々が海岸やさまざまな川の土手に集まり、サワン祭りを開催する。この祭りを通して、人々は水域から生じる自然災害について認識するようになる。住民達は、洪水や津波を防ぐための堤防や、大きな穴を掘る作業にも自発的に参加している。私の国では、地震や津波はよく知られている。2004年に、インドは巨大な津波に見舞われた。

消費主義の時代に、
梧陵は人間愛を示した
命を救っただけでなく
団結のメッセージも伝えた

協力して働くことも、この物語から導き出される重要な視点である。広村の人々は、協力して津波に立ち向かった。私たちも、ともに取り組むべきだ。それは個人の問題ではなく、地球規模の論点だ。

防ぐには、人と人との関わりやつながりが非常に重要だ。また、海岸沿いに先祖代々住んできた人々は、自然災害の検知に膨大な知識を持っているため、私たちは彼らとのつながりを維持するべきである。

災害を防ぐために手を取り合おう
これを行うには、梧陵 が私たちの指導者
梧陵 の努力は輝きを増している
私たちの小さな努力で、もっと輝く

（本仮訳は、読者の理解に資するため、事務局が作成したものです。細かなニュアンスなどは原文をご確認ください。）

2024年濱口梧陵国際作文コンテスト

～次代を担う高校生を対象～



大地震や大津波が来た時
あなたはどのようにしますか？

(写真提供: 広川町)

濱口梧陵氏が村人と整備し、今も住民を守る広村堤防
(延長600m、幅20m、高さ5m)

稲むらの火(逸話) 170年前のある日、**濱口梧陵氏**は、
自身の稲むらに火を放つことで大津波から多くの村人を避難させ、
その後も、情熱と私財を投じ、村の復旧、復興や防災に尽力された。



濱口梧陵氏

【補足】逸話は戦前の教科書に。11/5は防災の日や世界津波の日。私塾の開設や医学の支援も実施。

この逸話を読み、「考えたこと」「感じたこと」
「体験したこと」「思うこと」などを
自分の言葉で作文にしてみませんか。



濱口梧陵氏 稲むら
(資料提供: 内閣府防災担当)

【対象】国内外の高校生(国外は日本の高校相当)。

【様式】日本語又は英語。日本語1600字以内、英語700語以内。1人1点限定。

【賞等】優秀賞3点(最大)、入選15点(最大)。(応募者に参加証明書をメール)

賞状(優秀賞・入選)、副賞(優秀賞のみ高校に10万円(書籍購入等))。

[募集HP]: <https://www.pari.go.jp/event/seminar/hamaguchi-award/2024/2024-sakubun/index.html>



稲むらの火逸話 昨年受賞作品



高校生の皆さんの声をぜひ聴かせて下さい



【提出】メール又は郵送。7月31日必着。10月末頃公式HPにて公表予定。

【宛先】国際津波・沿岸防災技術啓発事業組織委員会(事務局)

[mail] hamaguchi_essay@p.mpat.go.jp (TEL: 046-844-5040)

[郵送] 〒239-0826 神奈川県横須賀市 長瀬3-1-1 港湾空港技術研究所

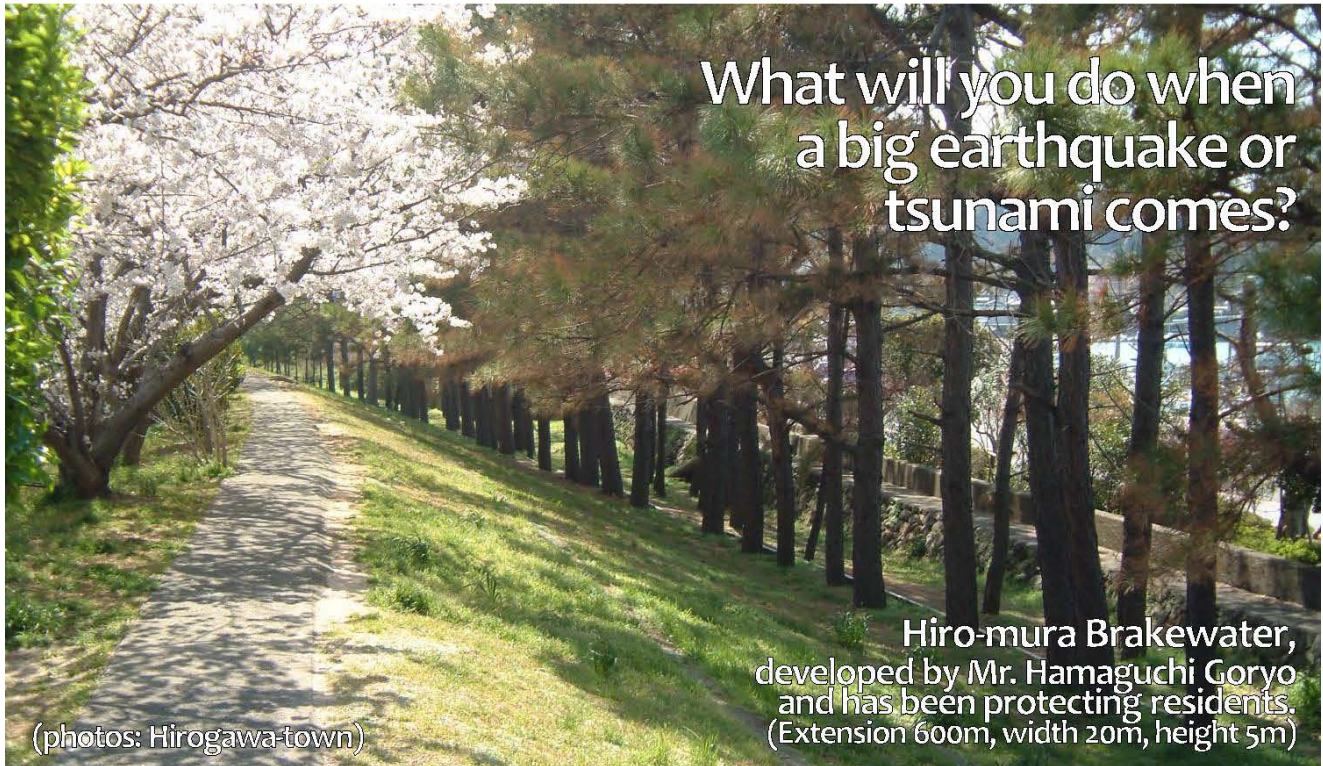
募集HP(日)

募集HP(英)



Hamaguchi Essay Contest 2024

for High School Students



What will you do when
a big earthquake or
tsunami comes?

Hiro-mura Brakewater,
developed by Mr. Hamaguchi Goryo
and has been protecting residents.
(Extension 600m, width 20m, height 5m)

(photos: Hirogawa-town)

Inamura-no-hi: One day 170 years ago, **Mr. Hamaguchi Goryo** evacuated many villagers from a large tsunami by setting his rice sheaves on fire. After that, he devoted his passion and personal funds to the restoration, reconstruction, and disaster prevention efforts for villagers.



Hamaguchi Goryo

THEMA: Through reading Japan's famous anecdote of "Inamura-no-hi", would you like to write an essay about your feelings, thoughts and experiences?



Inamura-no-hi
(Source: Cabinet Office)

GUIDELINES : Please check Guidelines from the website of the contest.

- by students enrolled in a school/organization equivalent to Japanese high school,
- 700 words or less in English, or 1600 characters or less in Japanese.
- submitted via e-mail with personal information according to the format style.

AWARDS : "Excellent award" up to 3 entrants and "Award" up to 15 entrants.

- Certificate of Award will be presented to "Excellent Award" and "Award" winners.
- Each school/organization in which each "Excellent Award" winner is enrolled will be provided with 100,000 Yen to use for the purchase of relevant books, and so on.



Anecdote of
Inamura-no-hi



Award
essays
2023

Details are
Here

Website
(EN)

Website
(JPN)



We look forward to seeing essays from you.

SUBMISSION: Deadline; **July 31, 2024**. Mail address; hamaguchi_essay@p.mpat.go.jp

- To; International Promotion Committee for Tsunami/Coastal Disaster Resilience Technology
- HP; <https://www.pari.go.jp/en/public-relations/hamaguchi-award/essay-ddcontest-2024/index.html>

This program is an activity supported by Ministry of Land, Infrastructure and Tourism "MLIT", Japan.

選考委員会 Selection Committee on the Hamaguchi Essay Contest

河田 恵昭（委員長） Prof. KAWATA Yoshiaki * ¹⁾	京都大学名誉教授、関西大学社会安全研究センター長、人と防災未来センター長 Professor Emeritus of Kyoto University, Director of Research Center for Societal Safety Sciences at Kansai University and Executive Director of Disaster Reduction and Human Renovation Institute, Japan
福田 敬大 Mr. FUKUDA Yukihiro	国土交通省 国土技術政策総合研究所長 Director General, National Institute for Land and Infrastructure Management, Japan
宮島 正悟 Mr. MIYAJIMA Shogo	国土交通省 国土技術政策総合研究所副所長 Deputy Director General, National Institute for Land and Infrastructure Management, Japan
藤田 光一 Dr. FUJITA Koichi	国立研究開発法人 土木研究所理事長 President, Public Works Research Institute, Japan
河合 弘泰 Dr. KAWAI Hiroyasu	国立研究開発法人 海上・港湾・航空技術研究所 港湾空港技術研究所長 Director General, Port and Airport Research Institute, Japan
有働 恵子 Prof. UDO Keiko	東北大学大学院工学研究科 教授 Professor, Department of Civil and Environmental Engineering, Tohoku University, Japan
濱口 道雄 Mr. HAMAGUCHI Michio	ヤマサ醤油株式会社 代表取締役会長 Chairman of the Board, YAMASA CORPORATION, Japan
崎山 光一 Mr. SAKIYAMA Koichi	稲むらの火の館 館長 Director of "Inamura-no-Hi no Yakata", Japan
Dr. Muzailin Affan	シャ・クアラ大学 国際室長・自然科学部准教授（インドネシア） Director of International Office and Assoc. Prof. Faculty of Natural Sciences, Syiah Kuala University, Indonesia

*¹⁾ Chairperson,

- 特別掲載 -
- Memorable Performance -

2023 年 優秀賞作品

2023 Excellent Award essay

TERAI Hana,

Wakayama Prefectural Hidaka High School, Japan

Title: Life-saving action

Life-saving action

Wakayama Prefecture has a close connection to nature. We can enjoy the beautiful mountains and sea. However, it is expected that a tsunami caused by Nankai Trough Earthquake will occur in Wakayama in the near future. That possibility is really scary, and I believe that damages caused by the earthquake and tsunami will be more extensive than we have expected. Unfortunately, we cannot prevent the damage completely. This is why efforts must be made to keep the damage to a minimum. So, what can we do now to minimize the damage of a tsunami?

First of all, as a way to prevent disasters, we can always raise awareness by preparing for disaster. This action has been taken since we were nursery school children. For instance, we have had some lessons on how to prepare for disasters. In a lesson, as soon as students hear the siren, we get under the desks. After that, we must go outside to a place, like a playground. In the cases of lessons of junior high schools and high schools, students check the way to go to a higher place by walking through the route. These activities are held a few times a year, and students take them seriously every time. However, I think that it's so hard for all people to put into practice what we have done in these lessons when a real disaster happens. One person who acted bravely during a disaster is Goryo Hamaguchi. I learned about Goryo Hamaguchi for the first time when I was an elementary school student. It's because I went to Inamura-no-Hi no Yakata in order to learn about the earthquake and tsunami in detail. At the time, I had just experienced the biggest earthquake that I had ever known, and I was also learning about natural disasters in the classes in my elementary school. Goryo Hamaguchi knew that a tsunami would come after a large earthquake. In those days, when the big earthquake occurred, he guessed that a tsunami would come. In order to warn people in the village of the danger, he lit rice sheaves on fire. And he shouted "Run away!!" Thanks to him and the fire, a lot of villagers' lives were saved. He was brave and great because he acted immediately to cope with the tsunami. Such spirit is essential to modern people. Now, we live in the age when every person has a smartphone, so we can get breaking news of an earthquake at any time. It is quite convenient. On the other hand, we may rely too much on the information from the media. Especially, young people hardly act only by themselves because they rely on smartphones. It is important to have the awareness for disaster prevention.

To heighten awareness, Bosai Festival was held in my city recently. This encourages participants to enjoy learning about disaster prevention with the festival, not in a classroom. Also, our city has a tsunami evacuation tower, so we can climb up the tower when we can't go to a higher place. By climbing up the tower, we can act much more quickly when we need to do so. Therefore, such events should be held regularly because it can help residents in the city address disaster prevention.

Furthermore, I realize that a connection between residents who live in the same community is really necessary. It's because people cannot accomplish everything without cooperation. People who have experienced disasters always say that others' kindness and warmth helped them. However, at present, the community bond is gradually fading. It is quite important for us to build relationships in the community to help with each other if something serious happens. By learning disaster preparedness, we will be able to protect ourselves first, which will help to protect the lives of people in the community around us. In addition, the idea that only my safety matters is wrong. Of course, my own life is valuable, but others' lives are also valuable. As Goryo Hamaguchi did, we should consider others. As a high school student, I strongly aim to become a person to act on my initiative like Goryo Hamaguchi.

命を救う行動（仮訳）

和歌山県は自然との関わりが深いです。美しい山と海を楽しめます。しかし、近い将来、和歌山では南海トラフ地震による津波の発生が予想されています。その可能性は本当に恐ろしく、私は地震や津波による被害は予想以上に甚大になると懸念します。残念ながら被害を完全に防ぐことはできません。だからこそ、被害を最小限に抑える努力が必要なのです。では、津波の被害を最小限に抑えるために今私たちは何ができるのでしょうか？

まず、災害を防ぐ方法として、災害に備えることで常に意識を高めておくことがあげられます。この取り組みは、私たちが保育園児の頃から行われています。例えば、災害に備えるための授業があります。訓練中、生徒たちはサイレンを聞くとすぐに机の下に入ります。その後、校庭などの場所に出なければなりません。中学校や高校の授業では、高台へ行くためのルートを歩いて確認します。この活動は年に数回行われており、学生たちは毎回真剣に取り組んでいます。しかし、実際の災害が起こった時に、この授業で行ったことを全ての人が実践するのはとても難しいことだと思います。災害時に勇敢に行動した人物の一人が濱口梧陵です。私が濱口梧陵のことを初めて知ったのは小学生の時でした。地震と津波について詳しく知るために「稲むらの火の館」に行ったからです。当時、私はこれまで経験したことのない大きな地震を経験したばかりで、小学校の授業でも自然災害について学んでいました。濱口梧陵は、大地震の後に津波が来ることを知っていました。当時、大地震が起きた時、津波が来るだろうと梧陵は予想しました。村の人々に危険を知らせるために、彼は稲むらに火をつけました。そして彼は「逃げろ！！」と叫びました。梧陵と火のおかげで、多くの村人の命が救われました。津波に対して即座に立ち向かった彼は勇敢で偉大でした。そうした精神は現代人にこそ必要なものです。今は誰もがスマホを持ち、いつでも地震速報を知ることができる時代です。それはとても便利です。一方で、私たちはメディアからの情報に頼りすぎているかもしれません。特に若者はスマホ依存のため、自分だけで行動することがほとんどありません。防災に対する意識を持つことが大切です。

意識を高めるために、最近、私の街で防災関連のイベントが開催されました。教室ではなく、祭りとともに楽しみながら防災について学ぶことができます。また、私たちの街には津波避難タワーがあり、高いところに行けない場合でも、タワーに登ることができます。タワーに登ることで、必要な行動をより迅速に行うことができるようになります。そのため、市民の防災意識の向上につながるこのようなイベントを、定期的に行うことが望まれます。

さらに、同じ地域に住む住民同士のつながりも本当に必要だと実感しています。それは、人は協力しなければ何事も成し遂げることができないからです。災害を経験した人は、人の優しさ、温かさに助けられた、と必ず言います。しかし、地域の絆は徐々に薄れつつあるのが現状です。何か重大なことが起こった場合にお互いに助け合える関係を、地域社会で構築することは非常に重要です。災害への心構えを学ぶことで、まず自分の身を守ることができ、それが周囲の地域の人々の命を守ることに繋がります。また、自分の安全だけが重要だという考えも間違っています。自分の命はもちろん大切ですが、他人の命も大切です。濱口梧陵がしたように、私たちも他人のことを考えるべきです。私は高校生として、濱口梧陵のように自ら進んで行動できる人になることを強く目指しています。

（本仮訳は、読者の理解に資するため、事務局が作成したものです。細かなニュアンスなどは原文をご確認ください。）

主催：国際津波・沿岸防災技術啓発事業組織委員会

(国研)海上・港湾・航空技術研究所 港湾空港技術研究所[事務局]、(国研)土木研究所、(公社)日本港湾協会、(一財)国際臨海開発研究センター、(一財)沿岸技術研究センター、(一財)みなと総合研究財団、(一財)港湾空港総合技術センター、(一財)国土技術研究センター、(一財)河川情報センター、(公財)河川財団、(一財)日本建設情報総合センター、(一財)先端建設技術センター、(一社)国際建設技術協会、(公社)日本河川協会、(一財)水源地環境センター、(公社)全国防災協会、(一社)全国海岸協会、(一財)土木研究センター

Organized by International Promotion Committee for Tsunami/Coastal Disaster Resilience Technology

Port and Airport Research Institute, National Institute of Maritime, Port and Aviation Technology (Secretariat),
Public Works Research Institute, The Ports and Harbours Association of Japan,
The Overseas Coastal Area Development Institute of Japan, Coastal Development Institute of Technology,
Waterfront Vitalization and Environment Research Foundation, Specialists Center of Port and Airport Engineering,
Japan Institute of Country-ology and Engineering, Foundation of River & Basin Integrated Communications,
The River Foundation, Japan Construction Information Center Foundation, Advanced Construction Technology Center,
Infrastructure Development Institute-Japan, Japan River Association, Water Resources Environment Center,
Association of Nationwide Disaster Prevention, National Association of Sea Coast, Public Works Research Center